曹洞宗大学の移転先はなぜ「駒沢」になったのか？　―地域史から考える―

佐藤　大樹

はじめに

明治15（1882）年に麻布区北日ヶ窪（現在の六本木ヒルズ周辺）で開校した駒澤大学は、学生数の増加等に伴う校舎の狭隘化を解消すべく、大正２（1913）年に現在の駒沢の地へと移転を行った。移転当時の校名は曹洞宗大学、駒沢移転から12年後の大正14（1925）年、大学昇格に合わせて現在の駒澤大学へと改称している。

令和５（2023）年は本学の駒沢移転から110年目にあたる。この節目の年に、2023年３月から当館大学史展示室では、「駒沢移転110周年展示　麻布から駒沢へ」を開催した（註１）。当展示の準備の段階で、本学の駒沢移転の経緯について、駒沢地域側の背景を探るべく情報収集を行った。本稿は、この情報収集で得た知見をまとめることを目的としたものである。

1. 本学の駒沢移転までの経緯

まずは、本学の側から見た移転の経緯についてまとめていく。本学の移転先が駒沢の地へ決定するまで、３つの候補地が挙がり実現には至らなかったことが、当時の本学の学内雑誌『和融誌』に記されている。

（１）麻布区笄町（曹洞宗高等学林跡地、1904年）（『和融誌』第８巻２号）

そもそも大学林の移転に関する議論は、曹洞宗高等学林の廃止、合併を端緒とする。曹洞宗高等学林は、もとは明治19（1886）年に曹洞宗瀧谷琢宗禅師、天台宗村田寂順大僧正、日蓮宗新居日薩大僧正らが発起人となり創立した各宗協同の教育機関であった。明治23年に曹洞宗一宗の独立経営となり東京曹洞宗中学林と称し、同28年には曹洞宗高等中学林、同34年に曹洞宗高等学林と改称した。同36年に専門学校令が発表となり、曹洞宗高等学林を大学林に合併し、大学部と高等部の２部を設置することとなった。この大学林と高等学林の合併を契機として、宗議会で議決されたのが、麻布区北日ヶ窪の校地を廃して、麻布区笄町の高等学林の土地に大学林を移転・増築する計画であった。

この移転・増築計画は曹洞宗の宗議会の議決を経ていたが、明治37年１月の大学林教職員による反対の建白書（註２）の提出を受け中止となった。

（２）巣鴨（1908年）（『和融誌』第13巻１号）

校舎の建築物、設備が古く、狭隘であることを理由に３か年計画で巣鴨方面へ移築することが、曹洞宗宗議会で議決したとの記事（註３）が載るが、その後の顛末は不明である。

（３）千葉鴻の台（現在の千葉県市川市国府台、1911年）（『和融誌』第15巻12号）

明治44（1911）年11月に「都離れした僻地」に移転が決定したとの記事が載り、間もなく同窓会員を中心に移転反対運動が起こった。同月中に宗門側と同窓会の調停が行われ、移転先は東京市内あるいは付近とすること、移転地選定に曹洞宗大学学長を参与させることなどの同窓会からの条件が出され、宗門側からは再び反対運動を起こさないこと、反対運動の件を曹洞宗管長に懺謝することなどの条件が出され、問題の終結をみた（註４）。

（４）駒沢移転に関する経緯（1912年）（『和融誌』第16巻７号）

明治45（1912）年１月、日置黙仙、来間琢道、波多野承五郎（三井物産重役）などの斡旋・紹介により、北日ヶ窪校地は牧田環氏に金12万6,500円で売却され、駒沢村に約１万１千坪の敷地を購入した。千葉鴻の台移転への反対運動がようやく収まったばかりというタイミングであったため、宗務院の弘津説三は同年６月に大学へ赴き懇切丁寧な説明を行った。校舎の解体・移転改築作業に伴い、９月から12月までは本郷駒込の曹洞宗第一中学林に大学の教場を移動し午後のみ授業を行った。『和融誌』第16巻８号には７月に第一中学林へ馬力による用具の運び込みが行われ、教場の取り

崩しが開始したとの記事が掲載されている。

2.「大学建築事務所日誌」に見る駒沢移転

「大学建築事務所日誌」(註5)は、北日ヶ窪校地から駒沢新校地への引っ越しの際に存在した大学建築事務所の業務日誌で、記述の期間は明治45（1912）年７月26日から大正２（1913）年３月10日までである。

明治45年７月26日は、養鶏場の経営者であった大沢氏との新校地の引継ぎの記録である(註6)。同30日に天皇崩御があり元号が明治から大正に改まると共に工事に遅れがでるが、８月９日までに鶏舎の取り壊しを終了し、10日からは門側の長屋を曳家にて移動する作業を行っている。15日からは教場、職員室、寄宿舎、便所等の基礎工事に取り掛かっている。９月23日には台風により、教場・寄宿舎の足場が崩れる事故があったが、翌日には復旧している。10月以降は各施設の上棟式が続く。10月１日に教場、21日に北側寄宿舎、28日に職員室、11月15日に食堂・炊事場、18日に大講堂の上棟式を行い、建築物の移転・改築はほぼ終了する。なお、現在も駒沢キャンパス内に残る献灯碑は12月20日、原坦山老師の碑は21日に建てられている。

12月になると、各建築物の内装工事が進み、北日ヶ窪校地、駒込の第１中学校から用具が運び込まれてくる。12月25日に日ヶ窪から荷物一台分が届いた記録を皮切りに、27日には第一中学林から机、椅子が届き、１月になると１月９日には日ヶ窪から馬力10台分、駒込から２台、10日には日ヶ窪から11台、11日は11台、12日は10台、13日は７台、17日は３台と大量の用具が運び込まれてくる。この用具の積み下ろし、整理、配置などには近隣の曹洞宗寺院である豪徳寺から僧侶の派遣を受け、作業にあたっている。１月11日に２名、12日に２名、13日に３名、15日に５名、17日に２名の記録がある。

もう一つ、注目すべき記録が、玉川電気会社による電柱の設置と内線工事である。12月17日の電灯取り定め条約締結に始まり、同18、23、24日、１月９、13、20、21日の作業により電灯内線工事を終了したと記録されている(註7)。玉川電気会社は玉川電気鉄道株式会社の電灯電力部門のことであろうと推測される。

3. 駒沢移転の頃の駒沢地域について　鉄道敷設と宅地開発

前章までで、駒沢移転に関する本学の事情について、概略を説明してきた。最終的に駒沢に決定した根拠について知ることはできないが、移転に関わる経緯は掴むことができる。一方で、移転先である駒沢地域の事情については、これまであまり言及してこなかった。本稿では、明治40年代から大正時代の駒沢地域の状況を概観し、本学の移転先決定を、地域史の中から捉えることを試みる。

（１）玉川電気鉄道株式会社による鉄道敷設と電灯電力供給

駒沢地域における鉄道敷設については、明治29（1896）年に玉川砂利電気鉄道と玉川電気鉄道の２件の出願があり、前者は世田谷から砧を抜けて登戸方面を結ぶ路線、後者は渋谷と玉川を結ぶ路線であった。明治33年の「玉川砂利電気鉄道線路延長変更の願書」により両社の路線は統合され、同35年に内務大臣の特許を得、同36年には玉川電気鉄道株式会社（以下、玉電とする。）として創立した。同37年に玉川～渋谷間の工事認可を受け、同40年３月に道玄坂上～三軒茶屋間、４月に三軒茶屋～玉川間、８月に道玄坂上～渋谷間が順次開通し、玉川～渋谷間を結ぶ路面電車として、昭和44（1969）年まで運営された。

ただし、玉電の敷設工事は順風満帆ではなく、日露戦争による経済封鎖や東京府による大山街道の拡幅工事が用地買収の遅滞で進まず、着手することさえできなかった。東京府から用地買収と拡幅工事を肩代わりすることで工事を開始することは可能となったが、資金が不足したため明治39年、東京信託株式会社(註8)から20万円の借入を行い、ようやく工事に着手することが可能となった。

玉電の主要な事業としては、鉄道業と並んで電灯電力事業があった。鉄道の沿線であった渋谷村、目黒村、世田谷村、駒沢村、玉川村などの地域では電力網の供給が可能となり、当時駒沢村の行政区であった荏原郡では明治42年上半期(註9)から大正２年下半期の５年間で電灯数が４,495燈から４～５倍の19,546燈に増加している(註10)。

この鉄道敷設による人員輸送の能力と電灯電力事業による電力供給により、本学が駒沢地域へ移転する上でのインフ

ラ面での条件はほぼ整ったと言える。

（２）東京信託株式会社による宅地開発

東京信託株式会社は、明治36年に岩崎一が創立した東京信託社を基礎とし、明治39年に三井関係の岩崎一、武智直道、津田興二、村上定、植松好仁、鈴木梅田郎、稲茂登三郎らが発起人となって創立した日本初の信託業務を扱う株式会社である。

この東京信託株式会社が大正元年に日本初の田園都市計画として企画したのが、東京府在原郡駒沢村及玉川村に跨る桜新町分譲地の造成と販売であった。明治39年、東京信託株式会社は玉電へ20万円の融資を行う条件として、新町停留所の設置、各戸への電灯、電話の設置、居住者への特別割引券の販売などが示され、実現している。新町住宅地の分譲は大正２年から行われ、関東大震災後には都心からの人口流入などもあり、多くの需要を生んだ(註11)。

本学の旧校地であった北日ヶ窪校地の売却の斡旋を行った波多野承五郎は三井物産重役であり、三井関係者が創立した東京信託が土地開発を進めていた駒沢地域が移転先となったことと全くの無関係であるとは考え難いところではあるが、繋がりを示す文書は今のところ把握できていない。

（３）駒沢村村長谷岡慶治による開発誘致

谷岡慶治は、明治、大正時代の篤農家で政治家。荏原郡駒沢村の初代村長で、明治27年２月の府議会議員選挙では荏原郡から出馬し当選している。同年９月には村長としての功績を認められ藍綬褒章を下賜されている(註12)。また、日本の園芸業の振興のため、駒沢村深沢に日本初の園芸高校である東京府立園芸学校（現在の東京都立園芸高等学校）が創設される際にも、多方面への働きかけを行った。

谷岡は、駒沢村の発展のためには土地開発が不可欠だと考えていた(註13)。鉄道敷設と電灯電力供給によりインフラ整備を行った玉電と、沿線の宅地開発と販売を行った東京信託による一体感のある地域開発の背景には、両社に相談役として名を連ねた谷岡の存在があったと推察される。

谷岡の名前は、本学の移転落慶式式次第(註14)の中に地方住民代表・谷岡某氏として確認することができる。谷岡と本学の駒沢移転に関する直接の関係を示す資料は、落慶式への参加以外は把握できていないが、今後さらなる資料の掘り起こしができればと考えている。

（４）さまざまな移転誘致　軍事施設

明治時代から大正時代にかけて、玉電沿線へ誘致された施設は本学だけではない。その代表例として、軍事施設を挙げることができる。明治20年代以降、都心にあった軍事施設が玉電沿線に移転し、用賀の自衛隊駐屯地や馬事公苑、三宿駐屯地や自衛隊中央病院など現在に残るものも多い。

軍事施設移転の背景には､建設のための豊富な土地の存在と鉄道敷設に伴う電灯電力供給が可能になったことがある。明治時代末には渋谷周辺の開発が進み、軍事関係者の多くが渋谷に居住し、通勤手段として玉電を利用したとされ、軍人向けの優待乗車券の販売も行われた(註15)。

4. 麻布区北日ヶ窪と駒沢を結ぶ道　玉電の輸送網

本学の駒沢移転では、北日ヶ窪校地にあった大講堂、教場、図書館などの建物を解体・輸送し、駒沢校地に移転・改築を行っている。また、大学の用具・用品類は、一時的に仮校舎となった駒込第１中学林に移送され、駒沢校地への移転・改築工事の終了後、再度移送されている。２章で掲げた『大学建築事務所日誌』によると、建物の移転、用具用品類の移送には馬力（馬に曳かせる荷馬車による輸送）が利用されていたようである。

この馬力の依頼先、調達先については明確な資料がない。しかし、玉電の砂利運搬の輸送網と重ねると１つの推測は可能となる。もともと玉電開業の目的の一つには、多摩川で採取した砂利を都心に運ぶことが掲げられていたが、開業当初は多摩川の砂利を都心へ運搬、販売する事業の成果は、あまり芳しくなかったようである。その原因としては、玉電の終点が都心から離れた渋谷であり、その先は馬力による輸送となったため、都心部まで鉄道輸送が可能な他社と比

較して高いコストがかかっていた。日本橋･深川方面へは川を下り海から陸揚げするルート､麹町牛込方面は甲武線（現在の中央線：お茶の水から八王子間の前身）からの乗り入れ、浅草方面には荒川の砂利が運ばれ、玉電からの砂利の供給先は麻布区一円と芝､赤坂の一部のみであった(註16)。きわめて限定的であった玉電の輸送網の中に､本学の旧校地（麻布区北日ヶ窪）と新校地（荏原郡駒沢村）はぴったりと合致する。これもまた、本学の駒沢移転を可能にした要因の一つであると指摘することができる。

5. まとめ　本学の駒沢移転と沿線開発

本稿では、駒沢移転の頃の、本学と駒沢地域の状況をそれぞれ概観した。明治時代から大正時代にかけて駒沢地域では、農村地帯からの脱却を図り、鉄道の敷設を契機とした電灯電力供給の確保、沿線における宅地開発、軍事施設等の誘致などを盛んに行っていた。

これまで駒沢移転を論じる際には、本学の事情からのみ移転の経緯を説明してきた(註17)。しかし、明治時代後期から大正時代初期にかけての駒沢地域における地域振興のための開発、誘致策を概観すれば、本学の移転もその中の一つとして捉える方が有効であろう。これは、本学の移転を駒沢地域の地域史の中で捉えるという試みでもある。

地域史の中で本学の移転を捉える時、重要となってくるであろう人物が、駒沢村初代村長の谷岡慶治である。谷岡に関する情報は未だ乏しく、今後資料の掘り起こし、調査、研究を通して明らかにしていかなければならない。移転から110年を迎えた本年、そろそろ地域史として大学史を語ることも必要ではなかろうか。

註

註１　令和５（2023）年４月10日～７月28日（於禅文化歴史博物館大学史展示室）

註２　大学林移転改築問題に関する交渉始末書

道に背き理に逆ふは非なり、既に非なることを知りて、強ゐて欲望を達せんと欲する者、非の遂行者としては、その罪甚た大なり、

抑も上に在る者、策略縦横以て企画せる欲望を実現せしめんか為、其の非なるを知つて而して道に背き理に逆ふ者ありとせば、その罪たるや最も大なるものあり、而してその下に在る者、専ら身辺四囲の僥倖を伺ひ、上の非行を陰に知り陽に見るも、危惧逡巡躊躇して敢諫するなくんば既に道に背き理に逆ふ大悪人なり、況んやその施設月に非にして方針亦常に定かならざるを見るに当りてや、抗命以て之が行動の非を敢て問はざる者は、自に背き他を欺くの徒にして、自信なき盲従者ならずとせんや、

顧ふに吾人同志は大学林移転改築問題に関し、架空の暴論を構へて当路者と抗争するを悦ぶ者にはあらざるなり、道理なき出張を敢てして当路者と議論を上下するを好む者にはあらざるなり、学林を無視して動乱を敢て醸し、以て将来有為の生徒を惑はすが如き愚を学ぶ者にはあらざるなり、況んや本宗の教育界に拭ふべからざる汚点を遺すが如きは吾人同志の忍ぶ所ならんや、唯々吾人同志は本宗育英の大任を担う者なるを以て、寤寝にも忘るゝこと能はざるものは、世の進運と馳駆して教育の進歩完全を企画し、以て倜儻雋才の人士を吾が宗門より出さんことを冀ふのみなり、吾人は元より宗規の範囲外に逸せざらんことを勤むるも、自信せる主義方針に正反対の障害物現はれたらんには、学林の為宗門教育の為め、職を賭して主義に殉死せんと欲する覚悟は、郷関を出づる時既に定まれるあり、

俄然晴天霹靂驟雨一駿、落ち来りたる雷魔は吾人同志の頭上なりき、そは本宗第七次議会に偶然出てゝ而して不意に通過せる、大学林移転改築議案之れなり、恰も暗討ちに会したるが如き吾人同志は、幸ひ常に主義方針の確立しあるが為に、毫も隊を乱さすが如き醜態を演せずして、道に依り理に順ひ、以て審議討論したる結果は左の建白書と現はるゝに至れり、

建白書

宇内百般の現実に鑑み、文運の趨勢其の停止する所を知らず候、世の育英の業に従事する者、既住に鑑み、而して将来を洞観するの明らかなるべからず候、吾第七次議会は、各宗中著名なる歴史を有する大学林をして、旧高等学林の場所に移転改築せんことを議決到候に因り、茲に大学林教職員一同の連署を以て、左の条件を建白する所以に御座候、

第一条　高等学林の旧跡は地形上一宗の大学林を設置するに不適当なるのみならず、腐朽せる木材を利用して、僅かに参萬有余の資金を投じ、以て弥縫的改築を為すは、既に不完全を免れざるなり、加ふるに敷地は借地なりとせば、一宗の恥辱之よりだいなるものはあらざる事、

第二条　前条に於いて高等学林の旧跡に大学林を移転改築するを不可なりとせば、第七次議会に通過せる大学林移転改築議決案を容認し、両貫主睨下の允可を得、宗報誌上に於いて、議員及び未派に公報其の旨を告示すること、

第三条　教育機関の完成を図るため止むなく移転改築するの必要ありとせば、東都適当なる地に、一万坪以上の地所を買ひ、而して十万円以上の資金を投じ、以て一大学舎を新築する事、

第四条　宗門現時の財政、前条の一大設計を企画するに耐ゑずとせば既に大学林事務寮より呈出せる改築修繕の案件を採用し、忽ちに現在地に其の施設を実行し、而して宗門財政の充実を俟つて、第三条を遂行する事、

第五条　第七次議会に議決せる移転を強ゐて実行せば、宗門教育界の中枢に大破綻を来し、為に教職員振はず、生徒勉めず、移転前後の年月は、今より全く動乱に終るべき事、

右の条項は本林教職員一同の志望に有之候間、曲げて御採用被遊度候、若し確実なる御回答無之候時は教職員一同大に決心固きもの有之候、尚ほ前条の解決就かざる間は教職員一同其の受持学課を休業可致候間、速に御通告の程奉待上候也、

一月八日

林長　山腰天鏡　　教授　大森知言　　仝　芝山唇外　　仝　浅野斧山　　仝　横井恵超　　学監　大森禅戒

副学監　棟方唯一　　寮監　新保祥麟　　曹洞宗学務部長　佐藤鉄額殿

註３　○本宗大学移転問題の議決　本稿の現校舎は明治14年の建築物にして、諸般の設備旧式に属し、且つ狭隘にて不便少なからざるを以て、移転改築の問題、同宗内に起り居りしか、愈旧臘同宗々會に之を提出し、終に今年より三年計画にて、巣鴨方面の好適地を占定し、移転改築することに議決したりと。

註４　▲同窓会にては去る極月五日、当校移転問題に関し反対運動を開き申し候、其後十四日間の長きに亘り或は満都の各新聞に意見を掲げ或意は檄を全国に飛ばすなど、実に其間は麻渓の学窓は暗憺たる有様を呈し申し候されば何時局を結ぶやは殆んと霧中に彷徨する感有之候へしかど幸に東京市寺院並に学士会員の熱誠なる同情、遂に高楠村上両博士の調停有之候て去る拾九日無事円満なる解決を見るに至り候、追って翌廿日午前八時より大講堂に於て会員一同搭袈裟着襪子の上両祖真前に恭しく懺謝致し候、尚調停の要領文を紹介すれば、（一）学校の移転地は市内附近に撰定する事、（二）移転地選定の議には曹洞大学々長を参与しむる事、（三）私立教育会を認定し其意見を採用する事、（四）学利調査会を開き宗立大中学より各々二名以上参与せしむる事、（五）教育制度は現状維持大体に於て其振作を計る事等の五ヶ条にして更に会員にては両博士に対し下の誓約を致し候、（一）本校移転に関して起こり事件は両博士に委任するべき事、（二）将来学生の本文を守り再び同盟の挙に出でざる事、（三）両博士を通して会員全体は管首猊下に懺謝する事等に有之候。

▲斯る事件起り、第一学期試験も自然お流れとなりしが、事円満に解決致し候へば、愈々来る拾五日より試験開始の由に候。

▲去る廿日　紛乱に紛乱を重ねたる事件も首尾よく落着致し、同窓の友、或は去り或は留まり、余程寂寥に覚え候へ共、在校の人至って多く賑きやかなる新春を迎へ申候。

▲去る月は令の事件有之候為め同窓会各部の活動は一時停止の有様にて候ひき、愈々新年を迎ふると共に、各部は目覚しき活動の色を現すべく、吾等は刮目して見るべきもの有之べくと期待致し居候。

註５　駒澤大学禅文化歴史博物館大学史資料室2003　駒大史ブックレット１『「大学建築事務所日誌」にみる駒沢移転』

註６　明治四十五年七月　二十六日　晴、本宗大学建設敷地常在之命ヲ受ケ、久保田（実宗）教学主事ニ随ヒ午前十時駒沢ニ来リ、大沢養鶏場ノ引継ヲナス、大学ヨリ溝江（石淳）寮監・学僕両三人ヲシテ、日常器具並ニ炊事用具ヲ運ハシ来リ、内僕牧野一人ヲ常在セシメ、炊事・清掃等ノ任ニ当ラシム、午后一時久保田・溝江両氏帰ラル、大沢氏夜ニ継キテ悉皆引払ハル

註７　（十二月）十七日　晴　高山・勝木氏出張、午前十時秋野学長、栗木部長、大森・梶川両氏出張、正門ノ位置、柔道・撃剣道場、延寿堂等ノ位置ヲ定メラル、玉川電気会社ヨリ来リ、電灯取定メ条約ヲナス、榎本辰五郎繕（ママ）場ノ件ニテ来リ契約取交シヲ了ス、中食六名

（一月）二十一日　晴　高山・勝木氏出張、本日ヨリ三日間学生入舎、五十余名到着、電灯内線工事全部終了、試験ヲナス、馬力一台仏具ヲ運来ル、仏師屋釈尊像ヲ奉送ス

註８　東京信託株式会社は、明治39（1906）年に設立され、（1926）年に日本不動産株式会社に改組された日本最古の信託会社である。その前身は、明治36年三井銀行地所の部長であった岩崎一が創立した、財産並に不動産の管理を主として土地建物の売買及び其仲介を事業とする東京信託社であった。

註９　本文では42年とあるが付表では43年

註10　「電燈競争と東電の変化」『週刊ダイヤモンド』大正３年６月号

註11　橋川武郎1995「第５章日本における信託会社の不動産業経営の起源－1906-1926年の東京信託の不動産業経営－」『不動産業に関する史的研究』

註12　明治27（1894）年９月５日朝日新聞記事

註13　為国孝敏　榛沢芳雄1993「玉川電気鉄道の変遷と東京西南部地域の変容との関連についての一考察」『土木史研究』第13号

註14　本学移転落慶式式次第『和融誌』第17巻第12號「駒澤だより」より

一．君ヶ代（二唱）

一．祝聖　　不老閣猊ト御親香

一．両祖諷経　　紫雲閣猊ト御親香

一．両本山貫主（ママ、首）猊下ご挨拶

一．教学部長報告

一．祝辞

文部大臣祝辞　　柴田宗教局長代読

村上博士祝辞演説　本校講師総代

宗会議員祝辞　　総代、木田韜光師

荏原郡長祝辞（代読）

地方住民祝辞　　総代、谷岡某氏

一．学長挨拶

註15　註11参照

註16　澤村幹三1913「東京の市外電車　（一）玉川電気鉄道会社」『週刊ダイヤモンド』大正２年９月号

註17　駒沢大学八十年史編纂委員会1962『駒澤大学80年史』254頁ほか

（さとう　だいき　駒澤大学禅文化歴史博物館学芸員）